

## 腹腔鏡下外科手術とは

消化器の外科手術がこの10年で大きく変わったことがあります。それは腹腔鏡下手術の進歩です。今から15年以上前に胆石症で手術を受けたご家族がいらっしゃいましたら手術の傷はどうでしょう。おそらくお腹のまん中か右の肋骨の下に15~25cm程の傷があると思います。しかしながら腹腔鏡下胆嚢摘出術を受けた患者さんの傷はお腹に1~2cmの傷が4ヶ所あるだけなのです。これが腹腔鏡下手術の利点です。お腹を大きく開けずともお腹のなかに腹腔鏡(カメラ)を入れて、その画像をテレビモニターに映し出しながら、外科医が手術をすすめるものです。臓器を細い鉗子で扱うためにお腹のなかの負担(侵襲)が少なく、それが痛みの軽減、早期の回復、美容上目立たないといった長所を生み、患者さんはその恩恵を得ることができます。当院は腹腔鏡下手術をはやくから導入し、さまざまな疾患に腹腔鏡下手術を積極的に応用している施設であります。現在までに胆石(胆嚢結石)症のみならず、総胆管結石手術、鼠径ヘルニア修復術、膵臓摘出術、虫垂切除術、胃や大腸の悪性疾患手術などに施行経験があります。

## 腹腔鏡下手術

今回ご紹介するのは、膵臓疾患に対する腹腔鏡下手術です。他疾患における腹腔鏡下手術の手法を膵臓疾患に対して応用したものです。全国で300例程しか行われていません。膵臓は胃の背面で左右に横たわる柔らかい臓器で、脊椎の前面の後腹膜腔に存在します。したがって膵臓の周囲には血管が非常に多く走行していて、開腹手術でも非常に神経を使う手術となります。しかしながら、テレビモニターはその血管を細部まで映し出してくれる利点があります。現在のところ膵臓の体尾部(左半分)の良性疾患において膵手術が行われています。胃を翻転して膵臓を見やすくしたところで、周囲の血管を丁寧にはずして膵臓を切離します。通常の手術では膵臓も一緒に摘除します(膵臓をとっても後遺症はありません)。一連の操作をお腹にあけた小さな傷5ヶ所で行います。臓器をお腹から取り出すために小切開(約3cm)の傷をつけることもありますが、開腹手術に比べてはるかに小さな傷で済みます。早い人で手術後1週間めに自宅退院できた方もいらっしゃいます。また、難治性の膵嚢胞を胃と吻合したり、膵臓悪性腫瘍の手術時に腹腔内を前もって観察したりすることにもこの手法は有用です。現在この腹腔鏡下手術は保険の適応外ですが、その手術方



図1 腹腔鏡下胆嚢摘出術です。細い鉗子で胆嚢をお腹から取り出します。

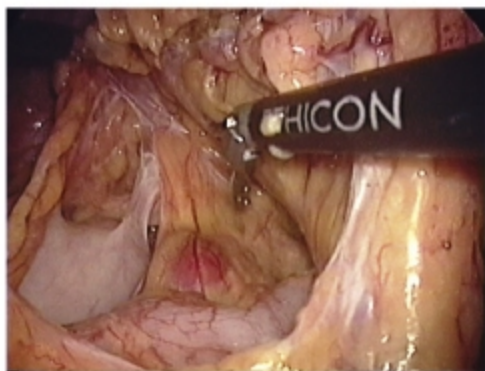


図2 腹腔鏡下膵手術です。胃の背面にある膵臓をみやすくするために周囲の組織を切離しながらすすめます。

法は厚生労働省で保険適応にむけて検討中であります。このように患者さんへ福音となるべく外科スタッフは腹腔鏡下手術の研究を積み、質の高い医療を提供させていただいております。とくに肝胆



図3 腹腔鏡下膵尾部切除後1ヶ月めの術創です。大きな傷と違って術後の劇痛はほとんどありません。

膵疾患に関して消化器内科専門医もいますので、当院は内科・外科の統括的な診療が可能な県内でも有数の施設であります。何かありましたらぜひご相談ください。